

## はじめに

### ● 論理的思考力を養う／考え、実践する

本書は、主に大学の法学部や法学科などで法学を専攻するみなさんを念頭において執筆したものである。とくに1年生のゼミ（演習科目）で、専攻科目の学習にスムーズに入っていくために利用されることを想定している。ただ、その後も折にふれて参照してもらいたい。また、法学専攻でない人や2年生以降の演習などにも利用してもらえれば、なおありがたい。

本書の基礎となったのは、西南学院大学法学部の有志教職員による授業改善の試みである。かねてより、ゼミ担当者の多くは、演習での議論やレジュメ・レポートが自分たちの期待しているレベルになかなか到達しないという悩みを抱えていた。それについて情報・意見を交換しているうちに、幾つかの試みがなされた。

1年生向けゼミに議会式ディベートを採り入れたところ、一定の型が与えられることで、議論が活発になるとともに質の向上もみられ、クラス対抗でディベート大会を開催するまでになった。レポートについても、ディベートからの発展として書けるようにゼミの内容に工夫をこらした。それらの準備段階には、従来から図書館職員による資料収集のガイダンス等が行われていた。加えて、ディベートやレポートの準備全般を上級生がサポートする制度（チューター・アシスタント）を整備し、以前よりもきめ細かな指導・助言ができるようになった。以上のような試みについては、西南学院大学 HP (<http://www.seinan-gu.ac.jp/jura> 2012年7月リニューアル公開予定) をご覧いただければ幸いである。

そうしたもろもろの情報を『演習資料集』という冊子にまとめ、新入生に配布してきたが、それをベースに、より多くの学生に利用してもらえるよう書き改めたのが本書である。その結果、本書には法学部生がゼミに参加するために必要な作法が、ほぼすべて含まれている。

ゼミの現場で工夫を重ねるなかで私たち執筆者が最も重視したのは、ディベートやディスカッション、学外見学を通じて、実践的に、時には楽しく、論

理的思考能力を身につけられるようになることである。この点は本書の最大の特徴にもなっている。さらに、ゼミの時間外に行うレポートやレジュメの作成、図書館での資料収集についても、授業時間内のゼミ活動の準備やその成果のまとめなどにすぐに活用できるように、実践的に書かれている。

論理的思考能力が、今、大学卒業生に最も期待されている。しかし論理的思考能力は、座って人の話を聞いている（それも必要だが）だけでは決して身につくものではない。ぜひ、本書を利用して、実際に考え議論してほしい。本文中のそこそこに挿入した〈例〉や〈練習問題〉は、実際のゼミで使っているものなので、きっと役に立つだろう。執筆者たちは、学生1人ひとりが演習に積極的に参加することで、無理なく論理的思考能力を身につけることができると信じている。

## ● 各章のねらい

本書はいくつかのパートに分かれており、それぞれ以下のようなねらいをもっている。

### I. 演習（ゼミ）ってなに？

高校の授業には存在しなかった（であろう）「演習」とはどのようなものなのかを説明している。ここで演習の本質を把握し、「演習」がめざしているものは何か、そしてみなさんに求められているものは何かをしっかりと把握しよう。

### II. レジュメを作ろう！

レジュメを作成するときにはあらかじめ知っておいたほうがよい心得やテクニックをまとめている。上手なレジュメの作り手になるには一に練習、二に練習だが、こうした一般的な心得・テクニックを知っていると知らないのとでは、上達の具合に格段の差が出る。折にふれ読み返してほしい。もっとも、ここで書いていることはあくまで一般論なので、TPOに応じた自分らしいレジュメが作れるようになるには、演習担当教員の具体的な指示に従うこと、また上手な人のレジュメを見習う心がけが必要である。

### III. ディベートをやってみよう！

議会式ディベートを演習の時間内に行うことを想定して、ディベートの進め方、ディベートができるようになるためのトレーニング、クラス対抗ディ

ベート大会のイメージ、について説明している。ディベートをこなすことができれば論理的な議論の方法を習得できるだろう。

### IV. レポートを書いてみよう！

レポートとは何かの説明から始まり、レポート作成の約束事、ディベートの経験に応用したレポート（ディベート活用型レポート）作成術、さらにそのヴァージョンアップ版（論点中心再編型レポート）作成術まで説明している。世の中にレポートの書き方はたくさんあるものの、それらに従って実際にレポートを書き上げるのは実はそれほど容易ではない。しかし、ディベートを学んだみなさんにとっては、この「ディベート活用型レポート」を経由する方法が、書き方を学ぶ最短距離である。「論点中心再編型レポート」まで進めば、どこに出しても立派に通用するレポートが書けるようになるはずだ。ただし、ここで紹介したレポートが唯一のスタイルというわけではない。学んだことをスタートに、他のスタイルのレポートも書けるようになってほしい。どういう場面で、どんなスタイルのレポートを書くかは、演習の教員の指示に従うこと。

### V. 情報集めは図書館で！

図書館を利用して情報を検索し、収集する方法を述べている。ディベートやレポートの準備で最も重要なのが、「確かな」情報を検索し集める収集能力である。情報といえば、インターネット。ところがインターネット上には不確かな情報も多く、「確かな」情報選びは至難の業。そこで本章では、図書館を活用した「確かな」情報検索・収集のポイントを、ディベート準備の流れに沿って4つのQ&A方式でまとめている。章末には具体的テーマに基づいたディベート準備の例も掲げているので、「ディベート準備といっても、何から始めたらいいかわからない」という人も、この章を読めば、最初の一歩が踏み出せるようになっている。はじめはとっつきにくいと思うかもしれないが、スポーツと同じで、1年生からの積み重ねで必ず上達するだろう。ぜひ、この本を手にとり、試行錯誤してほしい。

### VI. 論理的思考の現場を見よう！

裁判や議会の傍聴、また刑事施設の見学にあたって、事前に知っておいたほうがよい基本的知識および傍聴のポイントを紹介している。これらの現場を見ることは、法学や政治学を学ぶみなさんにとっては、専門教育で習得さ

れるはずの理論や知識が、実践でどのように用いられているのかを知る場でもある。ここでもやりとりの手段は基本的に「言葉」である。ディベートの基本的枠組みと対比させながら、できれば各主張の妥当性を判断してみよう。さらに、刑事事件の傍聴を通して、法の諸原則を確認し「傍聴」のもつ意味を考えると、また議会の傍聴や刑事施設の見学を通して、政治部門の働きや受刑者の処遇について明確なイメージをもつことを目標としている。

### ● 付録をホームページに掲載！

以上のような内容の本書を十分に活用し、培った力をもとに学習を進めてもらえるならば、執筆者一同これに勝る喜びはない。

なお、本書の付録として以下のものを法律文化社のホームページ、教科書関連情報に掲載している（URL <http://www.hou-bun.com/>）。また、本文上では該当箇所に **Look! HP** と表示している。

#### 【レジュメ関連】

- ・チェックリスト 「レジュメ印刷、その前に」(→15頁)

#### 【ディベート関連】

- ・ディベートを導入した基礎演習のプラン
- ・議長マニュアル (→40-41頁)
- ・ジャッジ：集計表 3人用ディベート／4人用ディベート
- ・ジャッジ：論理チェック表 3人用ディベート／4人用ディベート
- ・タイムキーパー・マニュアル (→41-42頁)
- ・タイムキーパー：残時間表示紙
- ・ディベート用スピーチ骨格カード (→27頁)
- ・ディベート進行モデル (→40-41頁)

#### 【レポート関連】

- ・チェックリスト 「レポート提出、その前に」(→74-75頁)
- ・本書IV章の「注のつけ方」練習問題 (→115頁) の解答例

本書と併せてぜひとも利用してほしい。

\* \* \*

本書の出版は、私たちの試みを暖かく見守り、サポートしてくださった西南

学院大学法学部・法科大学院の先輩・同僚諸氏の存在なしにはありえなかった。とくに、笹本幸祐教授（関西大学）には、西南学院大学在籍中、大きな役割を果たしていただいた。小寺智史氏（西南学院大学法学部准教授）、山邊亮祐くん、江口崇大くん、佐野彩香さん、藤原由美子さん、佐藤昂平くん（以上、同大学法学部学生）には、原稿作成の段階でご支援いただいた。西南学院大学図書館には、『演習資料集』の作成段階から多大な援助をいただいた。さらに、出版を勧め・ゴールまで導いてくださった法律文化社の田藤純子社長の存在なしには、本書は形にならなかつただろう。最後に、私事にわたるが、執筆者それぞれの家族にもいろいろな面で支えてもらった。この場を借りて感謝の意を表したい。

2012年1月

執筆者一同

